

スイミングスクールの必要性

小学校では春を迎えますと体育の授業で、プールでのスイミングの授業が始まります。

「新学習指導要綱」では「生きる力」として「健康」「安全」を通じた「楽しく明るい生活」を営む能力を身につけるため、体育の授業の中で様々な科目が行われています。

水辺が身近にある日本では、世界に例がないほど「水泳」の授業が重要視され、ほとんどの学校で取り入れられています。

その内容は

1年生、2年生では水と遊ぶ、水に慣れる、浮く、潜ることで「安全」を重視

3年生、4年生では浮き方、け伸び、キック、ストローク、呼吸と初歩の泳ぎ

5年生、6年生ではクロール、平泳ぎの距離、ゲームを通じて「身の安全確保」

といった到達目標で指導が行われています。

では、何故日本でこれほど「水泳」が学校で重視され、授業として実施されるのでしょうか。

一説では1950年に瀬戸内海で起きた「紫雲丸事件」、また1955年に起きた津市の橋北中学校の水泳訓練中に起きた

「津海岸集団水難事故」でいずれも多くの子供達が犠牲になったことから、学童、児童の泳力を育てる必要性が認識され

特に子供達の命を守るため「水泳」が重要視されるようになったといわれています。

そのため、小・中学校へのプールの導入が急ピッチで進められ、現在では小学校の87%以上にプールが設置されています。

そしてこの間に水難事故は死者3000人強から900人弱まで大きく減少しました。

しかし、毎年犠牲者は900人程度発生しており、その意味では水泳は第一級の「危機管理能力」として必要な能力と

いえます。

「水泳」ではこの危機管理能力を育てることが第一ですが、同時に子供達を学校で泳げない事によるみじめな思いをさせたくないという強い思いがあります。

それはほかならぬ私達コーチが、出来ないことによる辛い思いを抱いてきた経験があるからです。

自信にあふれた明るい子供に育てたい。ひとつの自信は全ての自信につながると考えています。

その思いは、キッズダンスを取り入れたことでも表れています。

やはり新学期指導要綱では中学校保健体育で武道、ダンスを含めた全ての領域が必修になりました。

その目的は「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、改善を図る。

その際、心と体を一体として捉え、健全な成長を促すことが重要である」とされています。

今後ほとんどの学校に広がっていくと思われれます。

ダンスは一時、暗いイメージで十分な理解を得られていない時期がありました。

私達は健全なスポーツとしてダンスを捉えていきます。

ベスパでしか出来ないこと、ベスパだから安心できること、まかせられること、

子供達がこれからも「自信を持って学校生活をおくる」ために私達は子供達に寄り添っていきたいと思っています。